

大好きな風景を取り戻すために

奈良市立一条高等学校附属中学校三年

鈴木 彩由奈

「水」と言われて、あなたは何を思い浮かべますか。私は、キラキラと輝く海の景色を思い浮かべます。でも、私の住む地域は海はなく、周りを見渡しても山しかありません。普段目にする水は、蛇口から出てくる水道水や、田んぼの横を流れる用水路の水くらいです。そのため、海を身近に感じたことはありません。しかし、遠くに住む祖父の家の近くにはきれいな海があります。幼い頃に家族と訪れ、初めて海を見たときの心躍る感覚は、今でも鮮明に覚えています。水平線まで続く広い青の世界、漁船の大きなエンジン音、鳥の羽ばたきや鳴き声。そんな景色は、山の緑に囲まれて暮らしてきた私をひどく驚かせ、胸をわくわくさせてくれました。私は先日、数年ぶりに祖父の家を訪れました。「またあの海に会える」と期待に胸を膨らませ、走って海へ向かいました。目の前には、私の大

好きな青い世界が広がっていました。漁船も鳥たちもそこにいました。しかし、どこか違和感を覚えたのです。あんなに大好きだった海を見ても何も感じなくなっていました。ふと足下に視線を落とすと、そこには色とりどりのモノが散らばっていました。それは決して美しくはない「ゴミ」でした。かつて私の心を動かしてくれた海には、ペットボトルや生ゴミ、たばこの吸い殻が散乱していました。自由に空を飛んでいたはずの鳥たちは、ゴミの間を窮屈そうに歩き、冷めた視線で地面を見つめているように見えしました。

そのとき、私は悲しみよりも先に大きな「罪悪感」を抱きました。海を汚しているのは、知らない誰かではなく自分なのだと気が付いたからです。普段、何気なくプラスチックを使い、蛇口をひねれば当たり前前に水が出てくる便利な生活を送っている私自身が、この景色を壊した一員であると思い知らされました。「身近に海がないから関係ない」と、無意識のうちに水

問題を自分から切り離していたことを痛感したのです。人間は、水がなければ生きていけません。水は飲み水としてだけでなく、私たちが食べる動植物を育み、気候を安定させ、あらゆる生命を繋ぐ「生命線」そのものです。地球上のすべての生き物にとって、水は命の源です。それなのに、私たちは感謝するどころか、乱暴に扱い汚してしまっています。

海のない地域に戻ってきた今、私は用水路を流れる水を見つめながら考えます。この水も、やがては川を下り、海へと繋がっていく。私がここでどのような行動を選ぶかが、あの海、そして世界中の海の景色に直結しているのだと。ゴミで埋め尽くされたあの景色が、いつか誰かの心を動かすほどの美しさを取り戻してほしいと願っています。昔のように鳥たちが自由に飛び回り、水平線まで続く澄み切った青を再生させるために、私は自分に出来ることから始めたいです。水を大切に使うことや、無駄なプラスチックを減らすこと。そんな私の小さな一歩

が、あの海だけでなく地球全体が抱える水問題を解決する支えになると信じています。